

目的 女子短大生の被服に対する関心度合いは一般的に高いとされており、このことが被服の嗜好・選択行動にどのように関わるのであろうか。この課題を検討する研究は多く報告されているが、本報では女子短大生だけでなく、その母親の被服に対する嗜好・選択行動についても調査し両者間を比較検討し、共通性および差を明確にすることによって、それぞれの衣生活観の傾向を把握することを目的とした。

方法 昭和61年12月に女子短大生270名およびその母親を対象にして質問紙調査法による調査を行った。主な調査項目は、被服の選択・購入の実態、被服の嗜好性、通学服に対する態度、世帯あたりの被服費割合、等である。

結果 被服の嗜好・選択・購入の実態については、専業主婦である母親と学生との間に差が認められるが、職業を有する母親と学生間には共通性がみられる。両者に差のみられる項目の一つをあげると、被服購入の際良質の商品であると判定する方法で、母親は「縫製・素材を確かめて」購入し、学生は「値段から考えて」購入するものが多い傾向にある。通学服に対する態度については、母親の職業の有無による差はみられず、学生との間に考え方の差が認められる。母親は娘の服装に対してかなり好意的であるが、娘は必ずしも母親の服装に対して好意を示していない。世帯あたりで被服費割合の最も大きいのは女子短大生とする率が高いが、女子短大生は被服にかかる費用は他の人よりも多い方だと思わず、むしろ少ないと感じているようである。費用が他の人よりも多いと思っている者の多くは新しいファッションや流行に関心が強く積極的にとりいれたいとする傾向にある。